

20世紀の遺産 遙かなる満州の地から 時空を超えて 21世紀日本の“多文化共生社会”のあり方を問う

The Legacy of the 20th Century From the Faraway Land of Manchuria, Transcending
Time and Space, Questioning the Nature of Japan's "Multicultural Society"
in the 21st Century

王 榮 (木 下 貴 雄)¹⁾

Wang Rong (Takao KINOSHITA)

要旨

2022年は旧満州国の建国から90年を迎える節目の年。1932年から中国の東北部にわずか13年間しか存在しなかった幻の国・「満州国」、日本の傀儡国家とも言われていた。その満州国で日本は、「五族協和」という建国理念の下、日本・満州・漢族・朝鮮・モンゴルの5つの民族が協力して、平和な国造りをし、共に生きていく、いわば「多民族・多文化共生」の社会づくりを推進していた歴史があった。あれから90年の歳月が経った。21世紀となった今、少子高齢化による労働力を補うために、多くの外国人労働力を受け入れるようになった。そして、文化の多様化に伴って、突如に“多文化共生²⁾”を進めるようになった。

本稿では、20世紀の遺産であり、国策として多くの開拓民の移住先となった、「満州国」の建国理念である“五族協和”の実態から、多くの民族が共に生きる21世紀における日本の“多文化共生社会”のあり方を問い、現在の日本と過去の満州国を繋ぎ、“五族協和”が不協和に終わってしまった遙かな満州の地から、今の“多文化共生”について学ぶものはないかについて概観する。

キーワード

満州国, 移民, 外国人, 多文化, 共生

1. はじめに

2022年、旧満州国の建国から90年を迎える節目の年である。

今から90年前、中国の東北部にわずか13年間しか存在しなかった幻の国・「満州国」があった。

その満州国の首都は現在の吉林省長春市だった。旧満州国時代では「新京（しんきょう）」と呼ばれていた。その当時の建物の多くはそのまま残っており、大学や病院などとして今も使われている。日本にとっても中国にとっても、まさに生きた歴史のテーマパークともいえる場所である。

1932年、日本は「五族協和・王道楽土」を建国理念として、この地に日本の傀儡国家「満州国」を造り、国策として、“満蒙開拓団”という名の「満州移民」を1945年の敗戦間際までに行っていた。そして、日本の敗戦によって、開拓民たちは国に見捨てられ、言語に絶するような逃避行を余儀なくされ、多くの尊い命が満州の凍土に散っていた。寛大な中国人に命を助けられた幼い子供たちは所謂“残留孤児³⁾”となり、半世紀にわたって中国で中国人として生き、1980年代以降にやっと帰国することができるようになった。筆者の亡き父もその背景を持つ一人である。

1932年～1945年の13年間、官僚をはじめ、鉄道や映画、民間企業などの多くの日本人が異国の満州の地で、異文化に触れながら、多文化共生の暮らしを営んでいた（はずであった）。

そんな歴史を持つ戦後の日本は、経済の高度成長を成し遂げて、80年代からの産業構造の変化に伴って、労働力が不足していたため、外国人の単純労働者を受け入れるようになってから、約半世紀を迎えようとしている。また、21世紀を迎えた今では、少子高齢化が進み、労働生産人口が著しく減少するなか、外

国人労働者に依存せざるをえない状況に陥り、外国人労働者の受け入れ拡大を進めることになった。

この過程において、外国人労働力の受け入れの増加に伴い、外国人の永住化・定住化が増えて、文化の摩擦や生活の習慣違いによるさまざまなトラブルが生じ、大きな社会問題にまで発展した。にもかかわらず、いつもは場当たりの対応療法しか行わなかった。そして、過去に進めてきた外国人労働者における受け入れ対策の功罪を振り返ることなく、「多文化共生」を突如に推進するようになったのは、2006年からであった。が、本質的なことはなにも変わらないまま、時だけが過ぎていた。

2020年、新型コロナウイルス感染の世界的大流行（パンデミック）によって、世界秩序は国際協調から自国第一主義に方向転換をみせている。あちらこちらの国で人種差別（特にアジア系に対して）が今まで以上に生じて、外国人を排除する行為が多発している。日本においても例外なく、外国人に対する嫌がらせやヘイトスピーチ、自治体による差別が頻繁に発生し、あげくに自国民への差別にまで発展している。

日本は、国による多文化共生を提唱してから16年になり、多文化共生推進プラン⁴⁾を作成し、推進されている自治体も増えている。にもかかわらず、この感染症という非常時にこそ、国籍や人種に関係なく、地域で暮らすすべての人々がお互いに支え合いながら、ともにこの困難な時期を乗り越えなければならぬのに、国も自治体も地域の人々もこの差別のまん延を野放ししたままで本当にいいのか、法を司る法務機関が外国人の人権を侵害し、コロナウイルス感染による困窮学生への支援給付に留学生にだけ学績の条件で差別する政府、この国が提唱している多文化

共生って、自治体が推進している多文化共生推進プランっていったいなんなのか、地域社会の人々は本当に多文化共生の意味を理解し、ともに暮らすことを望んでいるのかなど、疑問だらけである。

日本は且つては、多くの国民を海外に移民した歴史があった。そのひとつは、国策としての満州国への「満州移民」である。異国で生活を営む移民の苦難を十分にわかっているはずであるのに、このような状態が続くのはなぜなのか。

ここで、外国人コミュニティ、例えば「チャイニーズ・タウン」や「ブラジル・タウン」などが象徴する“多文化”日本の今と、満州国の“多民族”空間をつなぎ、満州移民の末裔の一人として考えてみたい。

日本では今、人口減や少子化を補うように外国人が増えているなか、多くの民族と文化が共に生きる社会のあり方が問われている。かつて日本が「五族協和」という理想なスローガンを掲げながらも、不協和に終わってしまった旧満州での共生から学ぶものがあるのではないかと。なぜ、一見理想的な「五族協和」という理念が実現しなかったのか。今の多文化共生を進めるにあたって、うまくいかなかった多民族共生の失敗事例としての参考にならないか、などである。

本稿では、20世紀の遺産であり、国策として多くの開拓民の移住先となった、日本の傀儡国家「満州国」の建国理念、“五族協和”のスローガンの実態から、多くの民族が共に生きる、21世紀における日本の“多文化共生社会”のあり方を問い、いまの日本と満州国をつなげて、“五族協和”が不協和に終わってしまった満州の地から、“多文化共生”について学ぶものはないかについて概観する。

2. 満州国、満州移民とは

満州国はどんな国だったか。

満州国は1932年3月1日から1945年8月15日の日本敗戦まで、13年5ヶ月にわたって現在の中国東北部（現中国の東北三省、遼寧省・吉林省・黒竜江省に、内モンゴル自治区と河北省の一部を含む地域）に存在した幻の国である。

1932年、満州事変で占領した土地に日本が建てた日本の傀儡国家だったという。傀儡は「あやつり人形」の意味だが、その人形として連れてこられたのが清朝最後の皇帝、溥儀（ふぎ）だった。清は満州族が造った王朝だったことから、その出身地で元首にしても国際的な非難は避けられると関東軍（満州の日本軍）はもくろんだ。しかし、国際連盟は満州国の建国を認めなかった。満州国を承認したのは、当時の日本同盟国のドイツやイタリア、太平洋戦争で日本の勢力下に入ったタイ、ビルマなどの約20ヵ国だけだった。

建国当時の人口は3000万人だったが、1940年には4300万人に増えていた。1940年の第1回満州国臨時国勢調査では、総人口における割合は、漢民族は90.2%、満州族は6.2%、朝鮮族は3.4%、モンゴル族は2.5%と続き、日本人は1.9%だった。農業移民によって建国当時より若干増加したものの、大きな変化がなかった。言わば、日本人が建国当時からマイノリティのままだった。日本の民間人は建国時の23万人から1945年敗戦時には155万人に増えたが、引き揚げの際に20万人以上が命を落としたとされている。また、敗戦直前に軍に動員された開拓団の男性を含め、軍人ら60万人以上がソ連によってシベリアに抑留され、死者は6万人を超えたという。

満州移民とはなんなのか。

当時の日本においては昭和恐慌と農村不況も相まって、困窮する零細農民や土地を持たぬ

小作農、土地を相続できない農家の次男以下などを開拓民として満州に移住させ、新天地での生活再建によって、農村の過剰人口による困窮を救済できるという目論であった。満州に行けば地主になれる、内地にいるより良い暮らしができるという勧誘が盛んに行われることによって、満州に憧れる風潮が生まれた。満州を新大陸や楽園（ユートピア）のように表現する映画や歌も作られた。

満州には内戦の続きに疲弊した中華民国からの漢人と、新しい環境を求める朝鮮人、そして日本政府の国策として、満蒙開拓団（満蒙開拓移民）らの移住・入植が相次ぎ、人口も急激に増加した。

満州国へ渡った農業移民である満蒙開拓団は全国から約27万人。そのうち約8万人が敗戦時の犠牲になった。中には青少年義勇軍として組織された少年たちもいた。「満蒙開拓」は国策として大々的に宣伝され推進されたが、戦後はあまり語られてこなかった。それは、あまりに壮絶な体験だったため、当事者たちが語ろうとしなかった。地域の中には満州行きを進めた立場の人もいて責任を問われていた。開拓団が手に入れた土地の中には、もともと現地住民の農地だったものもあったなど、様々な背景があった。「中国残留孤児」を生み出したのも満州への移民が背景にあった。

中国では、満州国のこと「偽満」と言われている。偽満とは、偽りの満州国のこと。つまり、満州国を認めないということ。中国人の土地を奪った日本がつくった国だからと解釈されている。

満州に移民した日本人にとってそこは希望の大地であったが、廉価で農地や家屋などを買ったたかれ、流亡を強いられた中国人にとっては、五族協和は希望を与えるものではなかった。13年間「偽満」時代の中国人の心

情を表した歌「松花江上（松花江の畔）⁵⁾」がある。筆者も中国にいた頃はよく口ずさんでいた。「偽満」は中国人にとって屈辱と流浪の始まりであり、「偽満」の崩壊によって故地に回帰し、離散した家族が一堂に会した時こそ、開拓民たちにとって悲惨と離別の始まりとなった。

1980年代末から90年代末にかけて、「偽満州国」の時代に日本の開拓民が入植した地域の農民聞き取り調査の結果によれば、満蒙開拓の実態には、日本の軍隊に土地を奪われる中国人農民の姿であったという。中国人農民は、自分たちの土地が奪われ、山野に追われて荒れ地を開墾するか、土地を手にした日本人開拓民の小作をするしかなかった。もともと貧乏な日本人農民が地主となる日本人の「優越感」があった。そんな感覚の「五族協和」は、ウソに終わるしかなかっただろう。

3. 五族協和・王道楽土とは

「五族協和」は、日本が「満州国」を建国した時の理念であった。1932年、満州国の成立にあたっては、「順天安民・王道楽土・五族協和・門戸開放」という建国宣言を高らかに謳い上げられた。五族とは満洲人・日本人・漢人・朝鮮人・蒙古人のことを指している。「五族協和」とは、この5つの民族が協力して、平和な国造りを行いましょうという趣旨のものである。当時の満州には、五族以外にも白系ロシア人やユダヤ人、ウイグル人等のイスラム教徒、オロチエン族、アルメニア人、放牧の少数民族など20くらい多様な民族からなる住人が居住していたと言われている。

建国理念として、満州国は「五族協和・王道楽土」を内外に宣伝し、特に日本人に夢を抱かせた。五族が仲良くやっっていこうと、最初にそう提唱したのは、民間の在満日本人が

つくった満州青年連盟の人たちであったと言われている。その背景には、圧倒的多数派の漢民族に排日感情が強まるなかで、建国当時は、人口の1%程度だった日本人が生きていくには、「協和」を訴えるしかなかったようであった。

1937年末の満州における人口構成を見ると、総人口数は3667万人で、最も多いのは漢民族で2973万人、全体の約81%を占めている。2番目は満州族で約435万人、約12%。モンゴル族で約98万人、約3%。朝鮮族は約93万人、3%弱。そして、最も少ないのは日本人で約42万人、1%弱だった。言わば、マイノリティであった。

「五族協（共）和」というスローガンは、もともとは中国で清末から唱えられるようになった「民族共和論」であった。中華民国の臨時大統領・孫文が辛亥革命に際して、従来の「滅満興漢⁶⁾」の主張に代えて、漢族・満族・蒙古族・回族・藏族の「五族共和」を唱え、多民族国家としての中華民国を統合するスローガンとして、各民族の共存共栄による「共和」制（共和国）をめざしたものである。日本が中国に建国し、牛耳った傀儡国家・満州国の国家イデオロギーとしての「五族協和」は、孫文の「五族共和」を換骨奪胎したもので、「共和」制の「共和」を「協和」にすり替え、孫文が主張した「五族共和」の剽窃であり、流用だったと指摘されている。このことから、日本は満州国を表面的には多民族国家として運営していく構想であったことが伺える。

一方、「王道楽土」とは、武力で制覇する「霸道」に対し、徳で治める「王道」でみんなが楽しく暮らせる国を築こう、という意味である。すなわち武力による征服、支配の政治を意味する言葉に対峙するもので、皇帝（王権）の仁政のもと、万民が幸福に暮らす

国家の理想的姿を意味している。アジア的理想国家（楽土）を、西洋の武による統治（霸道）ではなく東洋の徳による統治（王道）で造るという意味が込められている。日本の歴史の教科書には、日本の政府が「王道によって治められる安楽な土地」と説明して宣伝していたものもある。この理念が、日本の武力でできた満州国で唱えられたところに最初から矛盾があった。

満州国は実に矛盾だらけだった。

そのひとつとして、満州国には国籍法がなく、法的には「満州国民」は一人もいなかったことがあげられる。日本から出向または派遣された官僚や企業人は、本籍を日本に置いたままだった。民間の商人たちも出稼ぎ的な形で満州に渡っていた。満蒙開拓民も日本人として満州に移住し、敗戦とともに多くは日本に引き揚げてきた。例外としては中国残留婦人と孤児たちがあった。

また、行政のトップには中国人が置かれたが、それは名ばかりで、実権はその下にいる日本人が握っていた。初代の「国務院総理」をはじめとする行政人事は、名目上は満洲人がその体制のトップに就いた。だが、実質的な権力を握る次長、次官というナンバー・ツーのポストは、日本人の手にあった。日本軍による「内面指導⁶⁾」が「満洲国」の最高決定を拘束するものであり、皇帝溥儀といえども、日本人のあやつり人形、すなわち傀儡にほかならなかった。「王道楽土」が、画餅でしかなかったように、「五族協和」もまた理念倒れのものにすぎなかったと言わざるを得ないのであろう。

五族という民族協和の理念下、満州国は各民族に対して異なる方針をとっていた。たとえば、蒙古民族の指導にあたって、「漢蒙両民族は、互いに相容れざるの歴史を有するも、五族の中核たるべき日本人の熱烈なる指導に

より、漸を追ひて融合提携せしめ以て、有色人種の大団結を促進する」と決められ、日本人による指導に対して服従することは、民族大団結の前提であると明示している。この論調は、満洲国の民族指導方針にしばしば見受けられる。満洲国の住民に対して実施した調査報告書のなかでも「各民族は、民族協和の国是に基づき、最強最優秀民族たる日本人の指導下に、今や渾然融合せる新大陸文化の創造に向かって邁進」と述べている。満蒙開拓青少年義勇軍の編成に関する文章の中にも「満洲国をして真に日本民族を指導者とする五族協和の王道国家をらしめるためには、義勇軍の建設が不可欠だ」とうたえていた。

満洲育ちの映画監督のY氏は、五族協和の実態について、同じ満洲育ちの歌人のK氏との会談の中で次のように語っていた。

Y氏：ぼくたちが満洲で教えられたのは民族差別、やはり植民地の教育だよ。

K氏：五族協和ね。

Y氏：五族の中で日本人が一番優れているという教育。満洲という国は形の上では独立国なんだけど、ぼくたちは日本だと思っていた。中国人は使用人でしかないという。中国における日本の支配というのは相当ひどいものでしたよ。

こうした優等民族意識を在満の日本人たちは、大人も子供も一般的に持っていたのである。「五族協和」の掛け声も、それを実現しようとする満洲協和会も、“二つ屋根の下”に住む、同じ“家族、兄弟”（八紘一宇、民族協和）とは到底思えない上下関係や格差が、そこには厳然として存在していたのである。

満洲建国大学⁸⁾に入学入寮していた日本人学生の回想談では、入学入寮してはやばやと建国大学に幻滅していった学生もいたという。その理由は、こうした理念・理想としての「民族協和（五族協和）」と、現実の「満

洲国」の体制・社会との落差であり、背反であった。建国大学の学生は日本人、中国人のほか、朝鮮人、ロシア人、モンゴル人もいて、寮生活をともにした。食事に関しては、日本人は白米、中国人はコーリャンと差別していたという。

協和のスローガンとは裏腹に、日本人が一等国民、朝鮮人が二等国民、中国人が三等国民と序列を作って差別していた。社会の構造全体においてもやはり日本人が優先となっていた。物資の配給は日本人に有利になる差配があり、役所では日本人が重役出勤が許され、買い出しも満洲人の使用人にやらせていたという。職業も日本人全体の公務員と自由業が多いに対して、農林牧業に従事する漢民族や満洲族は全体人口の半数であった。

五族が対等の存在として協力し合い、和合するのではなく、明らかに日本人を指導民族、上層階級として、その下に各民族が序列的に並ぶものでしかなかった。まさしく、同床異夢の「満洲国」のなかの多民族・多文化共生であったと言えよう。

4. 歴史的遺産から

日本近代の歴史を振り返ってみると、帝国主義時代の日本は、大和民族を軸として、ほかの民族を大和民族との文化の近さによって序列を作り、中心である大和民族に同化させようとしていた。同化が相応しくないとと思われる民族を中心から遠ざかっていたことも明らかであった。

植民地時代、日本支配下の朝鮮半島、台湾で採った「皇民化政策」があった。植民地支配下の民衆を皇民化、「天皇のもとでの日本人」、つまり、日本人と同質の大日本帝国の国民となることを強制することだった。

朝鮮・台湾においては、以下のものがあった。

- ・日本語(国語)を徹底させるための教育。
- ・天皇崇拜, 日本の神社参拝などの強要。
- ・姓名を日本人と同じに改める。
- ・志願兵制度, 徴兵制度を導入, 戦時動員体制の強化。

また, その反面として, 各民族独自の言語, 文化, 宗教, さらに民族歌や民族旗は抑圧されたり, 禁止されていた。

さらに, 台湾や朝鮮半島出身者などは, 労働力として日本に連れて来られた。日本の敗戦により, 日本に連れて来られた者の多くはそのまま日本に在住している。在住者数でいうと最も多いのは朝鮮半島出身者である。1950年代, この人々の日本人としての身分はまた突如に剥奪され, 外国人にされてしまった。日本における外国人の在留管理と施策はここから始まり, 社会や人々による民族差別も同時に始まってしまった。突如に外国人にされてしまった在日コリアンは社会からの排除を受けて, 既存の社会保障制度などを利用することができず, 想像に絶する様ないじめや差別のなかで生きていかなければならなかった。

こうした背景から生まれたのは“在日コリアンによる在日コリアンのため”の諸支援であり, 自分たちが主体となって起こした社会運動によって, さまざまな差別を撤廃させ, 日本社会における自分たちの社会的地位の獲得を奮闘されてきたのである。1990年代以降に来日したニューカマーと言われる外国人たちは, その一部の恩恵を受けている, という事実を果たしてどれだけの人知っているのだろうか。いま, 当たり前になっていることは, 実は過去はそうではなかった。“在日コリアンによる在日コリアンのため”の諸支援が, 日本に暮らす外国人たちのためにもなっていることは, ぜひ, 多くの人々に知って欲しい。

皇民化政策とほぼ同時期に, 満州国で進め

られたのは「五族協和」だった。日本人, 中国人, モンゴル人, 朝鮮人, 満州人の五つの民族間の協和であった。そして, 「五族協和」という理想的なスローガンの実質は, 「大和民族の指導の下で, ほかの四つの民族が平等に共存共栄する」のであった。

戦前や戦中に日本が行った植民地時代の支配的政策とその精神的構造は, そのまま戦後の日本に継承され, 植民地時代の支配的政策の歴史を葬り, 朝鮮半島や台湾の出身者がいることを意図的に忘れ, 恰も日本は遠い昔から大和民族しか存在していない「単一民族」国家である仮面を被り続けてきたのである。

オールドカマーによる生存権や差別の撤廃運動の活発化とその後の日本への定住が進むなか, 日本に暮らすことを前提としたニューカマーの来日が増加するようになっていた。1970年代後半からインドシナ難民, 1980年代以降の中国残留孤児の永住帰国, 国際結婚によるアジア花嫁の増加がそうであった。また, 1990年代からは外国人労働者を受け入れるため, 「定住」という新たな資格が設けられ, 日系南米人が急増した。さらに, 技能実習制度が作られ, 研修を終了した者が一定の期間内で働くことが認められ, 外国人の単純労働者が増えるようになった。在住外国人の国籍・出身地は多様化し, 在留資格や働ける職種も増え, 階層化が進み, 序列化によって在留管理をされているのが実態である。

5. 21世紀の多文化共生 その実像と虚像から

2022年現在, この日本という空の下で, 日本人も含めて, 195ヶ国・出身地の人々が肩を寄せ合って暮らしている。単純に言えば, 195の異なる文化, 自分と違う他文化が共存している。そういう意味では, 日本はもう「単一文化社会」ではなく, 「多文化社会」に

なっている。これは間違いのない事実である。日本は「多文化社会」にはなったが、“多文化「共生」社会”になったか、と問われると、その答えは、人によってそれぞれだろうが、筆者の答えは、NOである。

最近、新たに素朴な疑問が出てきた。異なる文化背景を持つ者同士が「共生」する、つまり、ともに暮らし、ともに生きるためには、そもそも論になるが、「多文化」という“冠”を付けなければ、ともに生活を営むことはできないなのか、ということである。

2000年代、なぜ、突如に「多文化共生」が提唱されるようになったのか、その背景と経緯をまずきちんと理解する必要がある。多様な文化が仲良くともに生きていきましょう、という理想なスローガンに捉われて、その背景と経緯を表面的な理解だけでは、果たして真の「多文化共生」が生まれるのだろうか。

今、日本社会で進められている「多文化共生」とは何か、その理想なスローガンに踊られることなく、冷静に見極める必要があるのではないだろうか。

日本の“多文化共生社会”を語るうえで、「過去・現在・未来」という視点で考えなければならぬ。つまり、過去の歴史を鑑み、今の実態を見つめ直し、あるべき姿の未来図を描くこと。しっかりした基礎工事をせずに高層ビルを建てれば、いずれグラグラになって、崩れ落ちてしまうのであろう。

オールドカマーと呼ばれる在日コリアンの背景と経緯が歴史として存在しているにもかかわらず、今推進されている「多文化共生」の対象から外されている風潮を強く感じる。公的支援を受けている中国帰国者もその対象から外されている感がある。ゆえに、先ほど記したように、今、外国人を管理政策のもとで管理し、国が推進している多文化「共生」とは、何を意味しているのか。日本社会にい

る日本人と同じでない外国人、つまり、日本社会（日本人）に同化していない外国人に対しての共生（強制）ではないでしょうか。この日本で暮らすすべての異文化背景を持つ者を対象としているのではなく、突如に提唱された時の背景と経緯の対象を共生の対象としているだけのではないかと考える。

半世紀以上にわたって日本で暮らしている人々の人権無視や社会的排除、差別等々の問題を解決もせず、棚上げにしてもまま、さあ、多文化共生しましょう、みんな仲良く暮らしましょうって、うまくいくはずがない。提唱する側も推進する側もわかりきっていることである。コロナ禍のなかで、日本社会（人）の特性について再発見した。上の言うことにまったく疑わずに従順に従う“従順主義”と、同調圧力で徹底的に縛りつける“集団主義”の二つ。この二つの概念から考えると、提唱されているから、みんながやっているからなんとかしないといけないという盲点に陥ってしまっているのではないだろうか。

多文化共生を謳っていけば、やっていけば、多文化共生社会がうまくいく、成立すると思われているかもしれない。そんなに単純に成り立つなら、誰もが苦労しないだろう。文化の共生とはなにか、筆者は生身の人間同士のぶつかりあいであると考えている。人の中に無意識に刷り込まれている「文化」というものが、摩擦によって、自分と異なる文化を気づき、自分が持っている文化の良さを気づかされ、共通性と相違性が見いだされる。共通性を見出すことによって、共感が生まれ、それを共有することによって、ともに担い手としての協働が創り出されるのではないだろうか。

6. ともに問題の当事者として

生活支援において、支援と被支援という対

極の構図があるように、いま推進されている多文化共生にも、日本人と外国人という対極の構図になっていることはすでに明白になっている。いわば、日本人である“私たち”と外国人である“あなたたち”との共生である。この構図のままでは、いつまでも“私たち”と“あなたたち”との間に溝が横わたる共生で、しかも、その溝は恐らく埋まることなく、お互いの距離が縮まらないまま、“共生”にならない目に見えない“強制”が永遠に続くことではないでしょうか。

そもそも、外国人単純労働者を短期労働力として、長期的な施策を講じずに受け入れてきたため、数年で国に帰るだろうと思っていた外国人単純労働者が帰国しなくなった。永住や定住する傾向が強くなって、地域の日本人住民との間でのさまざまなトラブルが大きな社会問題となってしまった。それをなんとかしないといけないため、突如に多文化共生が提出された、というのは真相ではないでしょうか。しかも、明確な対応策を国として講じないまま、自治体にその対応を丸投げした。

また、地域社会とそこに暮らす日本人住民は、これまでの静かな暮らしは、外国人の急激な増加によってそのリズムが狂わされ、混乱に陥り、同調圧力で徹底的に縛りつける“集団主義”的な発想が噴出し、共生するまえに排除に走り出したのではないのでしょうか。日本はいま外国人に強く依存していること、外国人がいなければ自分たちの生活が成り立たなくなるという現実を知ろうともせず、或いは知って知らぬふりをして、我が事ではなく、他人事と思っていること、その意識と認識が多文化共生の大きな障碍となっているのではないのでしょうか。

多文化共生における問題は、日本社会（人）だけに問題があるのではない。異文化背景を

持つ人々にも同様である。この日本という空の下で、自分たちと子供たちの将来のために生活を営んでいくのであれば、お互いに理解し、尊重しあい、ともに生きていかなければならない。社会に問題があれば、周囲の力を借り乍ら、主体的に動かなければ、安定した社会的地位と生活を手にすることができないでしょう。何よりも次世代のキャリアデザインが描けなくなってしまう、夢や希望を失ってしまう恐れがある。なんとかなる、誰かが助けてくれる、いまが良ければ先のことはその時に考えればいい、といったような考えを持たずに、自分たちの「生活設計」をきちんと描く必要がある。それは、自分たちのためであり、次世代のためでもある。

多文化社会における共生は、一方通行ではなく、双方向でなければ、成立しないだろう。

多様な文化が共存するために、互いの違いを理解し、尊重し、認め合うことが重要であり、その意識を持つことが大事である。他人事ではなく、みんなが当事者である、我が事として、一人一人が意識し、考えるようになれば、共生に近づいていくのではないのでしょうか。

繰り返しになるが、日本は本当に多文化共生を望むのであれば、「過去・現在・未来」という視点で捉え、考えていかなければならない。1950年代に始まった外国人在留管理とその施策はどうであったか、そこに孕んだ問題はなんだったか、その問題が根本から解決したかどうか、なぜ、それが解決しなかったのか、その要因はなんだったのかなど、この歴史を振り返らずにして、いま進めている多文化共生は、「海市蜃楼⁹⁾」でしかなく、実を結ぶことがないまま、終わってしまうのではないかと感じている。過去に日本がたどってきた歴史を鑑みることなくして、明るい未来が果たして描けるのでしょうか。

かつて「五族協和」を理念に挙げて建国した「満州国」の実態にならないために、何よりも次世代に「負の遺産」を残さないためには、過去の歴史を鑑み、今の実態を見つめ直し、あるべき姿を思い浮かべて、国籍・民族に関係なく、この日本というキャンパスの上で、暮らしをともにするすべての人の手で、誰もが安心して暮らせる、真の多文化共生社会の未来図を描いていかなければならないのではないのでしょうか。

7. 引揚港・舞鶴の旅

「岸壁の母」の歌とともに全国に知られる引き揚げのまち・舞鶴。終戦直後、そこには多くの喜びと悲しみの人間ドラマがあった。

昭和20年（1945年）、日本の敗戦とともに、海外には660万人以上の日本人が取り残されたままだった。これらの邦人をすみやかに帰国させなければならなくなった。つまり、海外からの“引き揚げ”であった。

2022年、日中国交正常化50周年の年であり、筆者が日本に移住してから40年の年でもある。この節目の年に筆者は来日してから初めて東舞鶴に足を運んだ。目的地は、昭和30年（1955年）、中国天津・塘沽港で伯父が乗った引揚船・興安丸が入港した舞鶴港だった。

舞鶴港は、戦時中は旧海軍の軍事拠点で、戦後は政府が指定した引揚港の一つだった。昭和20年（1945年）10月7日の釜山港からの第一船「雲仙丸」の入港から、昭和33年（1958年）9月7日の樺太・真岡からの最終入港船「白山丸」まで、13年間の長きにわたり、延べ346隻の引揚船が入港し、66万4531人の旧ソ連（現ロシア連邦）、中国（旧満州）などの大陸からの引揚者と、1万6269柱の遺骨を受け入れていた。また、昭和25年（1950年）以降は国内唯一の引揚港として、引揚船を受けていたため、「引き揚げのまち・舞鶴」と

して全国にその名が知られるようになった。平成30年（2018年）、舞鶴市は引揚の史実と引揚者を温かく迎えたまちの歴史を後世に伝えるため、引揚第一船入港日の10月7日を「舞鶴引揚の日」として、条例を制定した。

昭和63年（1988年）、多くの引揚者が祖国への第一歩を踏み降ろし、人生の再スタートを切った舞鶴市・平の地に、日本への苦難に満ちた引き揚げと、筆舌に尽くしがたいシベリア抑留生活の歴史を後世に伝え、平和の尊さを世界に向けて発信するために、全国からの寄付金を受けて「舞鶴引揚記念館」が建てられた。また、平成6年（1994年）、引揚者が帰国の第一歩を踏み降ろし、帰還、そして、再会の舞台となった“平引揚棧橋”が平湾に復元された。

昭和20年（1955年）3月29日、伯父を載せた引揚船・興安丸が舞鶴港に入港した。乗船者数は816人、そのうち一般人は678人だった。出港地は中国天津・塘沽港、3月26日の出港だった。航海中に乗船者の一人が日本の地を踏むことなく、船の中で亡くなったそうだ。

興安丸の船名は、中国東北部に連なる大興安嶺山脈から付けられ、船の設計にも日本と中国の様式を取り入れた。興安丸のロビーには大興安嶺の油絵を飾っていたそうだ。

京都から特急「まいづる」号に揺られて1時間半、JR東舞鶴駅に着いたのは10時過ぎだった。駅の改札を出ると、“平引揚棧橋”の模型が出迎えてくれた。筆者の“舞鶴引揚の旅”はここからスタートした。

東舞鶴駅から「舞鶴引揚記念館」まではバスで15分ほどだった。記念館の前を少し過ぎたところがバスの降車場だった。バスを降りて少し戻ったところに、コンクリートで作られた「引揚記念公園」という大きな標識があった。記念公園という名に惹かれて、記念

館に入らず、そのまま記念公園のほうに足を運んだ。

舞鶴の平湾を望む丘の上にあるこの記念公園は、昭和45年（1970年）、「岸壁の母」の舞台となった舞鶴引揚援護局跡地を見下ろす丘陵地に引揚記念公園として整備され、公園の中に記念館を建てたそう。

デジカメを首にぶら下げて、記念館の裏手にある緩やかな坂道を登っていた。京都を出る時は曇り空だったが、舞鶴は快晴で気温も上昇して暑く、汗が止まらない、持ってきたタオルを頭に巻いて上り続けた。公園に続く園路沿いに八重桜の並木道が続く。ソメイヨシノ、八重桜など約170本が植えられて、それぞれの木の横に部隊名や団体名などが書かれた白い杭が立てられている。引き揚げやシベリア抑留体験者らによって植えられた記念樹だった。春になると、桜が満開するころには花見のスポットになっているそう。

坂道を10分ほど登ったところに10段ほどの階段があって、その上は記念公園だった。階段を登り切ったところで、公園内を見渡した。

公園の正面中央には大きな「望郷慰霊之碑」が建っていた。慰霊碑の前で一礼して両手を合わせた。その横の地面には方位磁針をかたどった羅針盤が設置してあった。真上から見下ろすと、北の方向を指す「N」文字の左側にナホトカの文字と、舞鶴とナホトカの距離を示す846.2キロの数字が刻まれていた。左側には「平和の群像」の記念碑があり、右側には「異国の丘」と「岸壁の母」の歌碑、「あゝ母なる国」の碑があった。右奥の隅には屋根付きの休憩所があって、引揚船が入港した時の様子を描いた「舞鶴引揚援護局俯瞰図」が設置してあった。舞鶴港に入港し引揚船から上陸する引揚者を大勢の人たちが日の丸を振って出迎える場面が描かれていた。

休憩所の奥には棧橋の形の展望台があっ

た。一番先端に立って目の前に広がる平湾を見わたした。三方向を緑の山に囲まれ、青い空に浮かぶ白い雲の下に美しくまるで湖のような小さな湾だった。左手は湾の入り口で、舞鶴クレインブリッジという大きな橋が架かっている。右手はほのかな田園風景が広がっている。右手の下には大きな木材工場があった。俯瞰図と合わせて見ると、この木材工場は引揚者の一時的収容所の場所であった。その工場の先の湾に面したところは昔の棧橋の場所だったが、当時の棧橋はもう残ってなく、今は同じ場所に復元した棧橋が設置されている。

記念公園を後にした筆者は坂道を下りながら記念館に向かった。

昭和63年（1988年）に建てられた記念館は、平成27年（2015年）10月にリニューアルしたそうで、こじんまりとした施設だった。館内には「平和」と「史実」を後世に語り継ぐために、シベリアの地での抑留生活を知る資料をはじめ、引き揚げに関する模型や写真など、全国から約12000点の貴重な資料の寄贈を受け、常設展示にて1000点を超える展示をされている。戦後70年を迎えた平成27年（2015年）、その収蔵資料の中から570点が、特に希少性が高く世界的にも重要性を持ち、広く世界の人々が共有すべき資料として、ユネスコの世界記憶遺産に登録されていた。

受付で入場券（400円）を購入して中に入った。エントランスホールには時鐘・日本人収容所の分布図・ガイダンス映像があり、時代を象徴する印象的な写真は激動の昭和時代へのタイムトンネルとなっている。トンネルの向こうには、「苦境の記憶～世界恐慌からシベリア抑留まで～」の貴重な資料や模型、遺留品などが展示されている。

シベリア抑留生活を体験できる体験室と丸太の持ち上げ体験ができるコーナーもある。

腰が悪いため丸太を持ち上げる体験は遠慮した。体験室は丸太で作ったシベリア抑留者の収容所の小屋のようだった。地面には積雪があり、寒さを感じた。ここは厳冬のシベリアであることを感じさせられた。小屋の入口の外には薪が積まれてあり、丸太を切るための大型ノコギリやスコップなどの作業道具が置いてあった。中に入ると、薄暗い部屋だった。土間の真ん中に薪のストーブが焚いてあり、左右の壁側には寝心地が悪そうな狭い木の板で作った二段ベッドのような寝ところがあった。横になって見たが、固くて寝心地が悪かった。部屋にあるランプはまるで蛍の光のような小さな明かりだった。窓の外は大吹雪、ビュービューと大きな風の音が聞こえる。本当のシベリアの厳冬はもっと厳しいだろう。固いベッドに仰向けになって、薄暗い天井を見つめながら、シベリア抑留者だったじいちゃんらのことを考えていた。

シベリアに抑留されていたじいちゃんは、日本人捕虜収容所で亡くなり、そのまま日本の地を踏むことなく帰らぬ人となった。その遺骨は同じ捕虜収容所にいた一番上の伯父に引き渡され、その伯父のシベリア帰還とともに無言の帰国となった。シベリアから引き揚げてきた一番上の伯父はどの港から引き揚げてきたかは、本人がすでに他界したため、聞くすべもないが、もしかするとこの舞鶴港だったのかもしれない。じいちゃんと一番上の伯父もこんな生活をしていただろうと思うと、悲しくなって目頭が熱くなった。

「帰還・そして再会」のコーナーでは、舞鶴引揚援護局、引揚船の模型と時鐘、岸壁の母・妻の紹介や遺留品などが展示している。最後の「平和への祈り」のコーナーでは、歓迎アーチと引揚棧橋、友好姉妹都市からの記念品、千羽鶴や来館者の感想などが展示している。

『舞鶴市史だより』等の資料によれば、引き揚げ当時の様相は以下のようだった。

昭和20年（1945年）10月7日、釜山からの第1船が西港へ入港してからしばらくの間は、同港への上陸が続いた。そのころの引揚者は朝鮮等からで、まだ引揚援護局等の受け入れ体制が整っていなかったため、上陸した人達は埠頭で帰国手続きを済ませて、その日のうちに帰郷するという敗戦直後の混乱状態の中であわただしく行われた。翌21年（1946年）4月からは中国本土の人々が上海から、さらに、6月からは満州地域の人々が葫蘆島から引き揚げて来た。葫蘆島帰還者のところからは、埠頭から臨港線で市内上安の元海軍工員宿舎・上安寮（現在の舞鶴自動車学校一帯）へ向かったが、その数は延べ約11万人に上り、舞鶴の引き揚げの歴史の中では俗に“上安時代”呼ばれた。

異境で転戦幾星霜、戦に敗れ、しかも永らく虜囚の苦しみを味い、身一つで故国へ帰り着いた出征軍人もさることながら、一般邦人の大半は、“大東亜共栄圏”の旗印の下に、あるいはずっとその前から海外諸地域に進出し、父祖代々、永年にわたって営々と築き上げた生活の基盤と全財産を、一夜にして失ったの引き揚げであっただけに、物心ともに打ちのめされた老人、婦女子、孤児、未亡人などの気の毒な姿は、出迎えの人々の涙をさそった。それでも故国の土を踏めた人はまだしも、言語に絶する逃避行や飢えに倒れた人、家族と離れ離れになった人々など、数知れぬ悲劇を生んだと伝えられている。

21年（1946年）12月からは遅れていたソ連地域からの引き揚げが開始され、約2年間続いた。このころから上陸地は西港から東港の平地区へと代わり、舞鶴地方引揚援護局で帰国手続きを済ませた後、特別列車でそれぞれ故郷へ帰って行った。このうち、旧軍人は敗

戦後、シベリアで抑留生活を過し、筆舌に尽せぬ強制労働に服していた人達で、ほどなく全国を風靡した“異国の丘”に歌われている通り、辛く切ない日々を祖国に帰り着くまで倒れてはならないと、歯を食いしばって頑張ってきた人達であった。舞鶴へ入港し、幾年振りかで故国の山々を眺めて全身に喜びを現していた。

23年（1948年）12月初旬になって、出港地のナホトカ港が凍結しているなどの理由で、ソ連地域からの引き揚げは約6ヵ月間中断され、翌年（1949年）6月再開されたのも束の間、翌25年（1950年）4月、ソ連当局は「ソ連地域の送還は完了した」と発表し、留守家族の不安をかきたてた。その後この問題は両国政府の間で折衝が続けられ、ようやく28年（1953年）12月、再開にこぎつけて、家族を始め関係者一同安堵の胸をなせおろしたのである。

一方、中国からの引き揚げも当初は順調に進み、21年（1946年）末には大半が終わった。その後、共産党と国民党の衝突、いわゆる「国共紛争」によって一時中断したが、28年（1953年）3月から再び開始された。この再開に当たっては、中国紅十字会と日本の平和三団体（日本赤十字社、日中友好協会、平和連絡会）の努力によるところが大きく、国民外交の成果との高い評価を受けた。また、この中国引き揚げの終わりころには、彼の地で中国人と結婚した日本婦人の、“里帰り”といった特殊な形の引き揚げ（一時帰国）も見られた。

引き揚げ最終船は33年（1958年）9月7日、472人を乗せて西港へ入港した樺太・真岡からの白山丸で、これで満13年間にわたる舞鶴の引き揚げの歴史は終わった。この間、引揚者総数の73%は旧軍人で、一般邦人は約26%。また、引揚者が抱いて帰った遺骨は、

地区別にみるとソ連11,652柱、中国4,542柱、朝鮮70柱、その他4柱であった。せっかく祖国へたどり着いたのに舞鶴地方引揚援護局内で死亡した人が360人、引揚船内での死亡が59人もあり、さらに、これら引揚者の中には孤児が101人もいて哀れをさそった。

舞鶴の引揚者は662,982人。その中では陸軍の引揚が72%を占め、ナホトカから引揚げた陸軍は435,353人で全体の68%になる。入港回数は346回、ナホトカからが230回（66%）、全期間を通じて言えば、ソ連からナホトカ経由での関東軍関係の引揚げが主だったことになる、というのは当時の状況だった。

記念館を見学した私筆者、復元された“平引揚棧橋”に向かった。案内板には車で2分の距離と書いてあったが、丘を下って歩いて行くには片道20分ほどかかると記念館のスタッフが教えてくれた。国道に沿って下っていくと、案内板があり、500メートル先と書いてあった。そのまま道なりに進んで行くと、右手に大きな木材工場が見えた。展望台から見えたあの工場だ。当時は引き揚げてきた人たちが一時的に身を寄せる収容所（舞鶴引揚者寮）の場所であった。さらに歩いていくと棧橋が見えた。

棧橋の手前の右側に、「まぶたの棧橋舞鶴よ」の歌詞板や寄付者の芳名版、「棧橋復元由緒」の案内板が立ってあった。左側の手前には満州やシベリアで亡くなった人たちの鎮魂のために建てられた「招霊の碑」があり、右側には平和を祈りながら鳴らす「語りの部の鐘」があった。「招霊の碑」の前で両手を合わせ、祈りを捧げた後、棧橋の先端のほうへ歩いて行った。周りは誰もいなかった。棧橋の先端に立ち、展望台にあった俯瞰図を思い浮かべながら、静けさのなか、一人で佇んでいった。静かだった。風と波、鳥のさえずり声以外は何も聞こえてこなかった。

なぜ、筆者が舞鶴引揚の一人旅をしようと思ったのか。その理由は、先にもふれたように昭和17年（1942年）、長野県の満蒙開拓団に伴って家族で満州に渡った伯父は、12歳で満州の地で敗戦を迎え、苦難な逃避行のなか、日本人収容所で祖母と当時5歳の伯父を看取り、自身も瀕死状態のなかで中国に命を救われて生き延びた。中国で10年間の辛い生活を経て、昭和30年（1955年）にこの舞鶴港から引き揚げてきたのであった。

筆者の手にその伯父が引き揚げてきた後に書いた手記「母ねむる大地」（周国賢著、第二書房刊、絶版）がある。その本の序文の前に舞鶴引揚者寮で撮影した写真が載っている。写真の日付は昭和20年（1945年）3月29日とあって、つまり、伯父が上陸した日に、舞鶴引揚者寮の前で撮ったものであった。

また、手記の最終章「祖国日本よ」の終わりに、こんな文章で締めくくっている『…いま、私たち日本語を忘れた日本人を載せた興安丸は、一路日本へと急いでいた。…。そして、塘沽を出て四日目の朝だった。「日本が見えるぞ！」甲板からの叫び声に先を争って甲板へ駆けあがった。「おお、見える、見える！」すべて黄色っぽく見える満州とはちがって、青々とした祖国日本の姿が刻々と我々に近づいてきていた。舞鶴の埠頭に兄さんたちが待っていてくれることだろう。「母さん、日本へ帰ってきた！日本へ帰ってきたんだよ…」そう叫びかけると、私の眼からは滔々として涙が溢れてきた。』

筆者は、伯父が旧満州から引き揚げてきた時に上陸し降り立った場所に立ってみたかった。どんな場所なのか自分の眼で確認してみたかった。何よりも伯父のその時の思いにふれてみたかった。

栈橋に立った筆者は、複雑に入り組んでいる平湾を見つめていた。心地良い風が拭き抜

き、わずかに潮の香りがした。綺麗な海だ。戦後77年の時を経た今、往時を偲ぶ建物は残っておらず、伯父が降り立った時の栈橋も無くなったが、この海は過去の悲しい辛い歴史をずっとみてきた。「伯父さん、きたよ、かつて伯父さんが引き揚げて上陸した舞鶴港に。今、伯父さんが故郷への第一歩を踏んで歩いたその栈橋に立っているよ」と、海に向かってつぶやいた。そして、向きを変えて海を背に立ち、目の前に広がる風景を見わたした。栈橋から延びる一本の道、白い雲が漂う青い空の下に、遠く正面と右側には緑色の山が見えた。青と白と緑のコントラストはまるで絵のようでとても綺麗だった。伯父もこの風景をみながら上陸したのだろうか、そんな思いにふけていた。

最後に、「語り部の鐘」を三回打ち鳴らした。静かな平湾のささ波をさえぎるかのようには、鐘の音は響いていた。再び栈橋の先端まで歩き、一礼して舞鶴港を後にした。

終戦77目の夏、舞鶴引揚の旅の思いを胸に、いつか再び訪れること願いながら…。

8. おわりに

新型コロナウイルスという目に見えない恐怖に私たちが晒されているいま、これまでに気がつかないまま、社会や人々の心に潜んでいたさまざまな矛盾が噴出してきているように感じる。海外では、欧米を中心にアジア人に対する人種差別が激増している。また、ロシアによるウクライナ侵攻によって、多くのウクライナ人が故郷を失い、家族を失い、異国への逃避行を余儀なくされている。ウクライナの避難民をかつての満州開拓避難民と重ねてみてしまうのは筆者だけではないはず。国連サミットで採択されたSDGsには、「人や国の不平等をなくそう」という項目がある。私たちの暮らしを豊かで持続的なものにするた

めには、人種差別問題は解決しなくてはいけない課題である。日本にいるとなかなか欧米の差別の実状を感じにくい、海を渡れば日本人もアジア人として差別的に見られる可能性が大いにあり、現に生じている。同時に、無意識のうちに差別する側になっている可能性があるということも忘れてはならない。

日本国内に目を向けば、自然災害をはじめ、貧困による格差の拡大、各種差別のまん延、人権侵害の深刻化などの問題が以前に増して多発している。なかでは、新型コロナウイルスの感染拡大によって、感染者やその家族、最前線でウイルスと闘う医療従事者、物流を支える運送業者、外国人などに対する差別やいじめが社会問題化している。このような言われなき差別が生まれる背景には何があるのか。そして、どうすれば差別やいじめをなくすことができるのか。日本に住む外国人や、外国にルーツがある人に対して、あなたはどんなイメージを持っているかなど、人種差別や偏見といった社会問題は、実は日本にも存在している。それが一般的に気付かれにくい背景には、“自分の中に差別的感情がある可能性”の受け入れ難さにあるかもしれない。

共生を進める上で、日本人と同等の権利（例えば参政権、社会保障など）がない在住外国人に対して、権利面での不平等が存在したまま、それに対する認識がなく、お互いの文化を尊重し共に生きようとは、あまりにも独り善がりである。

異なる民族と文化との共生とは何か、16年間にわたって進めてきた多文化共生の成果等について、いま、立ち止まって、多文化共生社会の在り方を見なすべき時期がきている。日本は本当に多文化共生を望んでいるのか、どんな多文化共生の社会を望んでいるのか、今までの在り方が本当に良かったのか、今後

の在り方をどうしていくべきかについて、場当たりの考えではなく、真剣に考えなければならぬ時期が来ている。スローガンを掲げれば、多文化共生を叫べれば、異なる文化がうまく共生していくはずがない、それは砂上の楼閣のように、時とともに崩れ落ちていくのであろう。

私たちは今もこれから、国籍や民族に関係なく、人として、多様な文化のなかで共に暮らす社会をどのようにつくれば良いのか、その答えを探る時には、自分のどこかに異なる民族、異なる文化を見下すような気持ちがないかを自問自答する必要があるだろう。

それが初めの一步ではないでしょうか。

ひとつの空の下で、人は人として、みんなは平等である。

注釈

- 1) 中国引揚者2世、1982年来日。大学非常勤講師（金城学院大学・愛知県立大学・大学院）、多文化ソーシャルワーカー、終活ライフケアプランナー、多文化国際介護士、認知症介助士、健康介護コンシェルジュ、心療回想士、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト代表、あいち多文化ソーシャルワーカーの会代表、中国帰国者公墓「平和之碑」管理委員会副委員長。公益財団法人愛知大学教育支援財団「同窓会功労賞」（2022年）受賞。日本文化経済新聞「“千年之約”杯 感動日本的十大旅日新聞人物」（2022年）に選ばれる。
- 2) 総務省は、多文化共生を「国籍や民族の異なる人々が互いに文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。
- 3) 厚生労働省の定義では、中国残留孤児とは「昭和20年8月9日にソ連参戦以降の極度な混乱下にあつて、中国（当時の旧満州、主に現在の中国東北地方）で日本人の両親と生死別した、当時12歳以下の者で、敗戦時に自分が置かれていた状況も身元もわからず、中国に残留し成長した者」となっている。対象となるほとんどの者

は子供である。

- 4) 総務省は、日系南米人等の外国人の増加を背景に、地域の国際化推進施策の重要施策である「国際交流」、「国際協力」に続く第3の柱として、多文化共生を位置付けし、2006年に「地方公共団体にける多文化共生の推進に係る指針・計画」に策定に資するため、「地域における多文化共生推進プラン」を策定し、各自治体に対して、多文化共生の計画的かつ総合的な推進を呼びかけた。
- 5) 歌詞の内容は、「私の家は東北 松花江の畔山には森と炭鉱野には高粱が豊かに満ちる 私の家は東北 松花江の畔 その地には我が同胞そして 年老いた父と母がいる あゝ 9.18 9.18 あの悲惨な時から愛する故郷を離れ 宝の場所を後にして さすらい さすらい 知らない土地をさすらい歩く いつの年 いつの日私が愛する故地へ帰れるのだろうか あゝ 同胞よ あゝ 同胞よ いつの日に 私が愛する故地を取り戻せるのか 父よ母よ 喜んで一堂に会するのは いつのことであろうか」
- 6) 中国の歴史用語の一つ。満州人の政権である清朝を滅ぼし、漢民族の国家を復興させようという意味のスローガン。
- 7) 内面指導とは、軍部が植民地統治に積極的に介入して、人事、実務を掌握してしまうこと。
- 8) 1938年、満州国の首都・新京（現在の長春市）に作られた国立大学。略称は建大であった。総長（学長）は満州国國務院総理が兼任になっていたが、実質的な責任者は日本人の副総長であった。日本が敗戦する1945年8月に閉学したが、それまでは高い倍率を勝ち取った約1400名の学生を9期にわたって受け入れていた。
- 9) 海市蜃楼は中国語。日本語の「蜃気楼」のこと。蜃気楼とは、下層大気の温度差などで空気の密度差がある時、光の異常屈折により、見えないはずの物体が見える現象。海上や砂漠で起こる。語源としては、蜃気楼の「蜃」は、大ハマグリのこと。「気」は「息」、「楼」は高い建物のこと。古代中国では、大ハマグリが空中に吐いた息によって描かれた楼閣と考えられていたことから、このような現象を「蜃気楼」と呼ぶようになった。意味としては、すぐに消え去る、夢のような、幻のように、束の間、うたかたの如くのようになっている。

参考文献・サイド

1. 朝倉美江 2007 多文化共生地域福祉への展望 多文化共生コミュニティと日系ブラジル人 高菅出版
2. 生田美智子 2015 女たちの満洲 多民族空間を生きて 大阪大学出版会
3. 大橋充人 2021 在日ムスリムの声を聴くー本当に必要な“配慮”とはなにかー 晃洋書房
4. 加藤聖文 2017 満蒙開拓団 虚妄の「日満一体」 岩波現代全書
5. 川村湊 2011 満洲国 砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望 現代書館
6. 木下貴雄 2003 二十世紀の遺産 世紀を超えて問う 中国残留孤児問題の今を考える 中国「残留孤」という名の「日系中国人」鳥影社
7. 木下貴雄 2021 墓碑に「満州移民」の歴史があり 墓地から平和への思いを馳せて 金城学院大学論集人文科学編 第18巻第1号
8. 小林弘忠 2017 満州開拓団の真実：なぜ、悲劇が起きてしまったのか 七つ森書館
9. 祝利 2014 「満洲国」における「民族協和」下の人材養成と日本語教育 Kyushu University Institutional Repository
9. 集英社 1995 満州の記録 満映フィルムに映された満州
10. 武田里子 2006 新潟県魚沼地域における「外国人花嫁」の存在の歴史的社会的意味の探求 (1) 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 No.7
11. 玉真之介 「満洲移民」から「満蒙開拓」へ一日中戦争開始後の日満農政一体化について一 弘前大学経済研究第19号
12. 谷富夫/稲月正/高畑幸 2020 社会再構築の挑戦 地域・多様性・未来 ミネルヴァ書房
13. 趙彦民 2016 「満洲移民」の歴史と記憶ー開拓団内のライフヒストリーからみるその多声性 明石書店
14. 塚瀬進 1998 満洲国ー「民族協和」の実像 吉川弘文館
15. 人間文化研究機構vol.21 2013 第22回公開講演会 画像資料による 日本人移民への新視点 満洲・ブラジル・南洋
16. 細谷亨 2018 満蒙開拓団と食糧問題・異民族支配 歴史と経済第239号
17. 二松啓紀 2015 移民たちの「満州」満蒙開

- 拓団の虚と実 平凡社新書
18. 舞鶴引揚記念館パンフレット
 19. 舞鶴市引揚港“まいづる”を偲ぶ全国の集い
実行委員会編 1985「引揚港舞鶴の記録 海外
引揚四十周年記念誌」舞鶴市
 20. 山室信一 2004 キメラ—満洲国の肖像 増
補版 中公新書
 21. 洋泉社 2018 満洲 NHK特集ドラマ『どこ
にもない国』を巡る
 22. 満蒙開拓平和記念館 <https://www.manmou>
[kinenkan.com/](https://www.manmou) 2022/7/6閲覧
 23. 舞鶴引揚記念館 <https://m-hikiage-museum.jp/>
2022/5/28閲覧
 24. 舞鶴市<https://www.city.maizuru.kyoto.jp/kyouiku/0000005359.html> 2022/8/28閲覧（10月7日『舞鶴引き揚げの日条例』）
 25. 舞鶴引揚物語 其の弐 まいづる観光ネット
<http://www.maizuru-kanko.net/story/hikiage.php>
2022/8/28閲覧